

フランシス・ブリンクリと和英大辞典

Francis Brinkley and An Unabridged Japanese-English Dictionary

長谷川 潔

はじめに

明治時代を代表する和英辞典として辞書研究者が、直ちにあげるのはヘボン(J. C. Hepburn)編『和英語林集成』〔俗称「平文字書」巻末は英和の部となっている〕であろう。彼の名はJames Curtis Hepburnとして日本で発行されているほとんどの和英辞典はもちろんの事、多くの国語辞典にもその名が記載されている。

明治時代に刊行された和英辞典の数は正確には分かっていないが、大小取り混ぜて35種類前後が出版されたと推定されている。^{※1} そのうち代表的なものが、前記「平文字書」とブリンクリ(F. Brinkley)・南條文雄編の『和英大辞典』であろう。しかし今日、フランシス・ブリンクリと彼の辞書を知る人は、ごく一部の辞書研究者を除いてはそれほど多くはない。

ブリンクリの生い立ちと来日

フランシス・ブリンクリ大尉(Captain Francis Brinkley)は、1841年アイルランドのラインスター県(Leinster Province)のミース郡(Meath County)の名門の家に生まれた。

フランシス・ブリンクリは5兄弟7姉妹の末弟である。彼は数理的才能を祖父より受け継ぎダブリン大学のTrinity Collegeで学び、数学と古典学で首席を占め、その方面で非凡な才能を示した。卒業後ケンブリッジ大学で数学を学ぼうとしたが、陸軍に入隊を志し、ロンドン郊外にある英国陸軍砲兵学校(The Royal Military Academy)で砲術を学んだ。^{※2}

英国陸軍の砲兵中尉であったブリンクリが縁あって来日したのは1867年(慶応3年)である。奇しくもヘボンの『和英語林集成』が出版された年であった。

ブリンクリは来日以来、日本の風物に魅了され日本人に愛着を感じ、熱心に日本語習得に勉めた。ブリンクリの進歩は著しく、また後に日本人を妻に迎えたので、彼の日本語は益々上達した。彼は日常会話ばかりでなく、仮名はもちろんの事、漢字も読み書きできるほどに上達した。

英字新聞の記者生活を30年

文才に恵まれていたブリンクリは1881年に*The Japan Mail*紙を譲り受け、その経営者兼主筆となった。メール紙上の記事にはほとんど彼の名は見あたらないが、主筆であるから社説は彼が書き下ろしたものであろう。

ブリンクリは非常に多趣味な人で、茶の湯をたしなみ、日本の美術に関しても造詣が深く、日本画は勿論のこと、陶磁器の鑑定にかけては趣味の域を脱し、専門家であった。彼自身による蒐集品の数も少なくなく、日本の古代の陶磁器ばかりでなく、中国の陶器も買い集めていた。従って美術に関する記事と、深い関心を持っていた宗教に関するものなどは、他人の署名があるものの他は大部分がブリンクリの筆になったものと推定される。^{※3}

ブリンクリは37歳にして水戸藩士の娘田中安子と横浜で結婚する。安子夫人はキリスト教の家庭に育った婦人であった。明治の初期、英国の法律は白人である英国人と、人種

9月10日(土) 小講演(新館308)

の異なる日本人との婚姻を認めていなかった。彼は非常に憤り膨大な費用を投じて英国法院に訴え、更にこの訴訟に勝って日本人と英国人との結婚に新しい判例を作った。プリンクリの例に倣って、その後、マンデル、ミルン、ベルツ等、日本婦人を妻に迎える英国人が次々と現れた。^{※4}

日本を愛し、日本人を愛したプリンクリの書く社説は常に日本擁護の立場に立ち、日本を支持している。また、宗教・美術など、日本の文化や風俗習慣に関する記事によって、東洋の一小国にすぎなかった日本及び日本人を世界に紹介するように努めている。

日清戦争以後プリンクリはロンドンで発行されているタイムズの日本通信員となった。F.B.の名で日本に関する記事をタイムズに送り、当時の日本人の生活や独自の文化のありのままの姿を、個性のあふれた英語で紹介するように努めた。日露戦争当時Times紙に連載された軍事通信及び「日本武士道論」は彼独特の名文で、英国及びヨーロッパの読者達に、未知の国日本に対する親愛感を植え付けたのである。

約30年間に及ぶ彼の記者生活の最後の記事は、乃木 希典大将が夫人と共に殉死したことを報ずるものであった。当時プリンクリは病床に伏せていたが、長女の英子さんに口述して四十数字の記事をタイムズに送った。次いで同じように口述によって「乃木將軍論」という記事をジャパン・メール紙に寄稿し日本の武士道を論じた。これがプリンクリの最後を飾る絶筆となったのである。^{※5}乃木大将の殉死より2ヶ月足らずの1912年10月28日麻布広尾町の自邸で71歳の生涯を閉じた。

「和英大辞典」An Unabridged Japanese-English Dictionary の出版

1. 発行年次の問題

昭和女子大学近代文学研究室発行の「近代文学研究叢書第13巻」のF.プリンクリの二・年譜によれば、F.プリンクリ、南條 文雄、岩崎 行親と共著の「和英大辞典」(An Unabridged Japanese-English Dictionary)は、1894年(明治27年)に三省堂から出版されたことになっている(P.302)。1977年に桐原書店から復刻出版された『語学独案内』に付けられている解題Ⅱ章Francis Brinkleyの人と生涯のD. Brinkleyの著作でも同じく1894年に出版されたと記されている。しかし前述した昭和女子大学発行の「近代文学研究叢書第13巻」311ページには「プリンクリの他の一つの英学会への功績として明治二十九年十月十二日三省堂から出版した南條 文雄、岩崎 行親と共著の「和英大辞典」(An Unabridged Japanese-English Dictionary)をあげることが出来よう。一六八七頁にわたる大部のものであり、明治の和英辞典としてはおそらく最も広く用いられたもので、日本語を学ぼうとする英米人にも大いに重宝がられた。この書が出版されるとかのヘボンの『和英辞典』も廃れたというから、これがいかに時勢の要求に適応したかが推察される。^{※6}」という記述がある1894年と1896年(明治29年)では2年の開きがある。どちらが正しいのであろうか。プリンクリに関する論文や本は数少ないが、どれも昭和女子大学の研究叢書の年譜を用いているらしく、「和英大辞典」の発行が1894年になっている。しかし実際出版されたのは1896年が正しいようだ。手元にある「和英大辞典」第8版のPREFACEはF. Brinkleyによって1986年10月2日に書かれている。このはしがきは初版のものと全く同じである。

2. A TABLE OF THE JAPANESE KANAについて

ヘボンの「和英語林集成」は無論のことであるが、プリンクリの「和英大辞典」も日本

9月10日(土) 小講演(新館308)

人ばかりではなく外国人が使えるように執筆されたい。プリンクリのPREFACE,日本語による緒言の次に我々の目を引きつけるのは、日本の仮名の一覧表であろう。IN SIX DIFFERENT FORMSと書かれているが、「イ」についても平仮名の「い」の他に万葉仮名として「伊」「異」が挙げられてあり、最近ではほとんど見ることのできない変体仮名も二つ紹介してある。

3. 「和英大辞典」の INTRODUCTION の特質

「和英大辞典」には23ページのINTRODUCTIONがつけられていて、次のことが詳しく解説されている。

1. THE STRUCTURE OF JAPANESE WORDS - 日本語の語いの構造
2. CHINESE CHARACTERS - 漢字
3. KANA - 仮名
4. TRANSLITERATION - 音訳(ある語をその発音通り他国語の文字に書き直したもの)
例 IDATE(伊達, the name of person changes into Date)
5. ŌIN - おー音

On the sounds produced by the combinations of Two or More Letters of Kana

6. LETTER CHANGES - 文字の変化

例 te-kami (手紙, a letter) tegami

7. ACCENT - アクセント

例 箸hasi 橋hasi 花hana 鼻hana

8. OUTLINES of JAPANESE GRAMMAR - 日本語の文法

The Noun 名詞、The Pronoun 代名詞、The Adjective 形容詞、The Numeral 数詞、
The Verb 動詞、The Postposition 後置詞(Japanese postpositions corresponds to
English prepositions)、The Adverb 副詞、The Conjunction 接続詞

4. 「和英大辞典」見出し語句と訳語

「和英語辞林集成」の採録語数は初版、再版、三版ともはっきりしているが、筆者の知る限り「和英大辞典」の採録語数は不明である。しかし、「和英語辞林集成」の三版に採録されている35,618語をかなり大幅に上回っているのではなかろうか。おそらく5万語から7万語前後が採録されているものと思われる。

訳語については、まず我々に密接な関係のある大学という言葉について調べてみよう。「和英語辞林集成」の初版には次の二つしか記載されていない。

DAI-GAKU ダイガク 大學、n. The great learning - one of the four books of Confucius : DAI-GAKURYO ダイガクレウ 大學寮、Imperial university at Kyoto
「和英大辞典」の方には次の7語が見出し語として採録されている。

Daigaku、だいがく、大學、n. ①A university. ②The name of a Chinese classical treatise on politics and ethics

Daigakuko、だいがくかう、大學校、n. A Collage ; a university

Daigaku-in、だいがくいん、大學院、n. The University Hall

Daigaku-no-kami、だいがくのかみ、大學頭

Daigakusha、だいがくしゃ、大學者

9月10日(土) 小講演(新館308)

Daigaku-shokubutuen、だいがくのしょくぶつえん、大學植物園

Daigaku-zushokawan、だいがくずしょくわん、大學圖書館、The University Library

このように大学に関する語いを比べてみるだけでも1867年から1896年の30年間の間に大学の施設が増え、大学に関する考え方も現在の大学に近づきつつあることが分かる。

次に、「学校」という言葉を見てみよう。1862年(文久2年)に出版された「英和对訳袖珍辞書」では、schoolは「稽古所」となっている。ヘボンの「和英語林集成」には、ケイコバ、ガクモンショという訳語の他にジユク(塾)という語が載っている。現代の社会でとかく批判や話題の種となっている塾も明治時代には学校という意味で用いられていたであろう。

ブリנקリの「和英大辞典」には学校に関する語いが大幅に増えている。

Gakko、がっこう、學校、n. A school ; an academy ; a seminary

学校に関する語いとしては學期、學区、學科、學、學風、學芸、學業、學術、學問、學齡、學歷、學寮、學力、學才、學生、學制、學者、學士、學識、學習院、學頭、學友など、ヘボンの「和英語林集成」に比べるとはるかに多い。

まとめ-和英大辞典に対する評価

ブリנקリ、南條 文雄、岩崎 行親編纂による「和英大辞典」に対する辞書学者の評価は以外と高くない。ヘボンの『和英語林集成』が「ローマ字表記の普及化、日本語彙の解説、英訳、日本語の文法的体系化、日本語の紹介など、およそ『和英語林集成』の業績は開明の慈光ともいふべきものであった維新の大業を成し遂げ、近代国家として発足して日が浅かった当時の先覚たちが、この『平文字書』を持ち得たことは何たる天の恩恵であつたらうか？」^{注7}『日本の英学100年』において高く評価されているのに対し、同書の『和英大辞典』に対する記述は次のごとしである。

「三省堂はイギリス砲兵大尉ブリנקリー・南條 文雄らの共編になる『和英大辞典』を発行した。ときに明治二十九年、日清戦争の終わった翌年のことであつた。この辞書は従来の和英ほどではないが、それでも『平文字書』からの借用や書き換えがいちじるしく目立ちやはりこの『和英大辞典』にしても『平文字書』の影響から脱しきれないことはできなかった。」^{注8}

確かに『平文字書』からの借用はあるが、筆者のみるところでは採録語数が倍近くあるのではないかと思われる。さらに日本語の文法的体系、音声面での研究、日本文化の紹介にブリנקリ独自のものがあり、ブリנקリ及び『和英大辞典』をはじめ彼の書き残した多くの業績は再検討されても良いのではないかと思われる。現在までは「語学独案内」のみが、ごくわずかの学者によって研究されているにすぎない。語学独案内のみならず彼の全体像、及び『和英大辞典』の更に深い研究がなされることを心から望みたい。

注1 「日本の英学100年」編集部：『日本の英学100年』4巻のうち特に「明治編」研究社1968

注2~6 昭和女子大学近代文学研究室：『近代文学研究叢書第13巻』「ブリנקリ」昭和女子大学近代文学研究室1959

ブリנקリ「語学独案内」復刻版刊行委員会：『語学独案内』桐原書店1977

森川 隆司：「語学独案内」の発行年次と著者の人柄『幕末明治英文学史論集』近代文芸社1993

注7、8 「日本の英学100年」編集部：『日本の英学100年』4巻のうち特に「明治編」研究社1968